

## 宮沢賢治の作品に見られる「非暴力主義」「自己犠牲の精神」と「菜食主義」の一考察

——インド人の観点から

はじめに

宮沢賢治の童話作品のどれを見ても、ある種の神秘的な自然観にあふれ、賢治独自の人生観、世界観及び宗教観の色彩に富んでいる。詩人や作家は誰でも普通と違う想像力を持ち、独創的な創造力の持ち主であることには相違ないが、賢治の想像力は超自然的で、一般人の認識と感受性を超えた領域にある。

彼のイマジネーションの深さ、そして感受性の鋭さは超能力者にしか見られない、神性に近いものである。一度も見たことのない、または立ち会って経験したこともない事柄や自然現象の描写に当たっても、賢治はまるで目の前で今見ながら描いているような多元描写で自然現象を表現する。彼の生まれつきの能力は神性に近いものとさえいえる。日本から何千キロも離れていて、日本では絶対観察

プラット・アブラハム・ジョージ

できない空模様や地形図を、正確に、しかも読者を納得させるように描写するところにも賢治の人並みならぬ、超自然的な能力が顕現しているといえる。彼はこれらの自然現象や事柄を自分の心の目と肉体の目で見ていたのではないか。詩人原子朗が「賢治という人はただの文学者天才ではなく、なまじインドや南十字星を見た者よりカラダごと深くそれらを「観て」いたのかもしれない」と指摘しているように、彼は心だけでなく体をも想像世界へ持つていつて物事を「観て」いたに違いない。彼の物事を観察する鋭い眼差しは、自然現象の奥義を貫き、そこに潜んでいる「神秘性」を見つけ出す力を持つていた。それは普通の人の常識を超えた領域を観察できる優れた視覚的・聴覚的頭脳の持ち主でなければなかなか持ち得ないものである。

彼のものの見方と考え方、宇宙観とビジョンは、同時代の文壇に

において強い影響力を放射していた主流の文学者や思想家のそれとは全く異質のものであったに違いない。文壇に入ることも、自分の名前を売り物にすることも彼の目的ではなかった。彼にとっては宗教は芸術で、芸術は宗教<sup>(2)</sup>だったし、それは自分の信じていた宗教を振り所にした人類への献身によって平安と喜びをもたらすものであった。それゆえ、終生それを達成するための活動を怠らなかつた。

「苦痛を享樂できる人はほんたうの詩人です。もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるひは惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか<sup>(3)</sup>」と実弟宮沢清六宛の手紙に認めているように、彼の宇宙観は岩手県、若しくは日本といった狭い領域にとどまるものではなかつた。宇宙上のすべての生き物が彼の目に等しく映り、人間だけではなく太陽系のすべての生き物が共存共栄できる環境を作り上げない限り人類の幸福はありえないものであると彼は深く信じていた。この独特の思想こそ彼を当時の文壇から孤立させた一大原因ではなかつたのか。

「賢治は、同時代の思想潮流を分析して、それが自分の性向に合わぬものであることを見てとった一人の知識人なのであった。視覚的聴覚的天恵を受けやすいウィリアム・ブレイク<sup>(4)</sup>の特性を兼ね備えた無名の予言者であり、一つの広大な理想を抱く人間だった」とマロリ・フロムも指摘しているが、その預言者たる性質が彼の人生観を

形成し、彼の作品に他と違う次元を与えているのである。

では、賢治に同時代の流れにそぐわない発想を生み出させた靈感はどこから出たのか、彼の並外れた想像力と幻想力を培った重要要因は何であつたのか。

人間は自分のおかれている環境の奴隷だとよくいわれる。この世に生まれてくる子供はみんな大体同じ大きさの脳を持って生まれてくるのだそうである。つまり、どの子供も同程度の可能性を持って生みの母のお腹から育ての母なる大自然のふところに生まれてくるのである。そしてその子は、自分の身の回りの世界を目の当たりにして、その世界から物事を学び取り、その世界によって自分の「己」を形成して一人間として成長していく。その成長過程の背景となる環境の「違い」こそが、人間にその「個性」を育む大きな原因となる外力である。どんなに恵まれた家庭に生まれ育った子供でも、由緒のある家柄の後継者であっても、自分のおかれている環境、自分の行き先の方向性を決める外力の勢いと種類、そして自分の幼いときに受けた精神上的の刺激や教養上のインプットなどによって人格が形成されるのである。よって、ある子供は自己中心的な志向を有し、自分の利益のことばかり考える人間に成長してゆく。またある子供は飢餓や病魔などと闘っている同胞の苦しみ心が動かされて、自分自身を犠牲にしても彼らの涙を拭いてあげようとする志の持ち主になる。あるいはまたある人は優れた建設的想像力を培い

普通と違う、別世界の人間のような人生を送ろうとする。

私たち人間は考える動物だといわれるが、やはり動物だから人間も動物的な本能の奴隷で、自分の利益ばかり考えてしまうのがごく自然のことなのである。しかし、一瞬の出来事で気が変わって、人のために一生を使い尽くそうと決心する人も少なくはない。マハートマ・ガンジーもマーチン・ルーサー・キングもマザー・テレーズも、また宮沢賢治も、そのような人間ではなかったのか。各々の歩んだ道や取った手段及び活動の規模はそれぞれ異なっていたが、彼らは皆社会の福祉、人類の平等と人権に基づく総合的な成長を目指す共通の目的を持っていたのではないか。

宮沢賢治の人格を形成し、彼の人生の方向性を回転させて、最終的に自己を犠牲にしても他人の苦悩をなくさなければならぬという理念に彼の考え方を定着させた外力には、いくつかのものがあつた。

仏教徒の家に生まれ育つた彼は幼い時期から心に生き物に対する慈悲と同情の念を抱えていた。小学校で先生に読んで聞かされた童話や民話は彼の幼い心に好奇心と想像力の種を蒔いた。それに、クリスチャンだった担任の先生や、花巻や盛岡で活躍していたキリスト教宣教師の感化でキリスト教的な世界観にも子供のときから触れることができた。<sup>(6)</sup> 少年期に心に蒔いておいた好奇心と想像力の種は思春期になると芽を出し始めた。そして、山や谷、川や森を彷徨し、

自然の神秘と真理の追求を行うと共に、彼独特の人生観及び世界観を形成しながら大人へと成長していった。執着は人間の人生をいかに苦しめるかという真実に気がつき、執着から脱出できればすべての苦悩や煩悩からの解放が可能であるという仏教の教えに導かれていたと言ったほうがもっと適当であるかもしれない。自分の周りで貧困にあえいでいる貧民の苦悩の原因も、執着に起因するものだというふうに取り取っていたに違いない。執着さえなければ、煩悩や輪廻転生から脱出でき、菩薩の道に入れるのだが普通の人にはなかなかそれができない。そこで、その身代わりとして、賢治は修行の道を選び、性欲を抑制するとともに結婚を差し控えて、無執着の道を選んだのではないか。

人のために一生を尽くすこと、または人に仕えるための労力を惜しまないということは皆にできることではない。しかしそれができる人は他と違う想像力と超人的能力の持ち主となり、独特のビジョンと世界観を作り出す人間になる。そして「デクノボー」になって人に仕えることが、彼らの人生の唯一の目的となる。賢治もおそらくそれを望んでいたのであろう。「賢治という人間は風とともに誕生し、光のような風の波に乗ってこの世を去っていった。賢治の詩も童話も、その本来のあり方においては風が吹いて話がはじまり、風が吹いて終息に向かう」と山折哲雄が指摘している。彼の体内にも一つの風が絶え間なく吹いていたと思う。それは決して嵐に変わ

って人類に害悪をもたらすような風ではなく、涼しい微風になって人の傷をいやそうとする穏やかで光り輝く「貝の火」のようなものであった。そして、前述のように、仏教の教えの中核である「慈悲」と「同情」、キリスト教の教えである「愛」と「原罪」の意識がその思想の肥やしとなった。

賢治の作品を貫いている宗教思想に基づく普遍性こそ、現在、彼の作品が日本国内外の読者や研究者に高く評価される一大原因となったと考えられる。彼の作品のほとんどは、英語を始め、世界の各主要言語に翻訳され、広く読まれている。それに、賢治研究もかつてない勢いを見せ、世界的に広まっていく昨今である。インドでも、賢治作品がいくつかの公用語に翻訳され、読まれるようになった。

インドは本来、日本文学研究があまり進んでいない国であるが、賢治作品に顕現しているインド・仏教的思想のためなのか、最近、賢治研究に興味を示している数人の若い研究者が現れている。その研究者の一人として、しかも、インド人の観点から賢治作品を解釈して、それらの作品を貫いているインド・仏教的思想を浮き彫りにすることが、本原稿のねらいである。

宗教の精神を活動の基盤とし、そこから他と違う宇宙観と人生観を培った詩人・童話作家賢治の「菜食主義」をはじめ、諸思想を正確に理解するために、彼の人生に最大の影響を及ぼした「外力」はどんなものであったのか、まずふれておきたいと思う。

### 賢治の思想と人格を形成した諸外力

裕福な家庭の長男として明治二十九年（一八九六年）八月二十七日に岩手県稗貫郡里川口村（現在の花巻市）の宮沢家に生まれた賢治も生まれたときはごく普通の子供であった。他と大きく違っていたのは、質・古着商をしていた彼の実家は貧困にあえぐ近所の農家と比較にならないほど富裕であったことと、父宮沢政次郎は熱心な浄土真宗の信者であったことである。この二つの要素は共に後の賢治の人生を大きく転向させた主な原因となったのだと思う。父政次郎と母イチは長男を行儀のよい男の子に育てることだけで精一杯で、彼を大変大切にしていた、近所の子供たちとの遊びとか交わりさえ制限していたといわれる。<sup>(8)</sup>

小学校時代の賢治は利口で好奇心と探求心を持った子供だったし、石や昆虫、鉱物などを集めるのに夢中で「石っ子賢さん」というあだ名までついてしまうような、あどけない子供であった。クラスの成績も優秀で、読書も好きであった。五来素川の『未だ見ぬ親』（東文館、一九〇三年）、フランスの童話作家・小説家マロ・エクトール・アンリ（Hector Henri Malot(1830-1907)）の「家なき子」、「海に塩のあるわけ」などの童話や民話を、小学校三年生の担任であった八木英三先生に読み聞かされて大変感動したという。<sup>(9)</sup>「私の詩は哲学的に、思想的に、また宗教的に考へたときに、非常に偉大

なものと自負してゐますが、思想の根底はすべて先生の童話から貰つたやうに思つて感謝してゐます」と賢治が後に汽車の中で、八木先生に偶然会つたとき、感謝を述べている。<sup>(10)</sup>つまり、賢治にとつては八木先生に読んで聞かされた童話や民話は、子供時代の自分に大きな刺激を与えてくれた主な外力の一つだった。それは、彼をただ夢の世界へ連れていってくれただけではなく、宇宙や自然現象に対する好奇心を生み出す原動力となつて、心の奥の奥へ、動物と人間の区別さえつかないすばらしい想像の世界への扉を開けてくれたのである。そして、後にその扉の開け口からほとぼしつてきたものが童話となり詩となつて現れた。

また、小学校時代の賢治は父の質・古着商を誇りに思つていただけではなく、家の長男として家業を受け継ぐ考えさえ持つていた。

賢治は小学校四年生のとき書いた「立志」という課題作文の中で「お父さんの後をついで、立ばな質屋の商人になります」と書いた<sup>(11)</sup>そうである。職業名からもわかるように、質屋の商売とは貧しい人々の持ち物や着物などを質に置いて彼らに高い利子のお金を貸し出すことである。貧困にあえぐ農民たちにとっては、自分の持ち物を質にして借りた金どころかその利子さえ返済できない場合が多い。結局、質屋がそれらの物の所有権を譲られ、それらを売って得るお金で益々裕福に発展していくわけである。幼い賢治には質屋の商売に隠れているからくりがおそらくわからなかつただろう。それで家

業を賞賛して作文を書いたのだと思う。しかし、まもなく賢治が家業のことを嫌うようになり、他人の不幸を利用して栄えた自分の家を蛭や蠅にたとえて非難することになるのだが、その主な理由は第二の外力である仏教の教えであると思われる。

賢治の父宮沢政次郎は質・古着商を営んでいたにもかかわらず、浄土真宗の熱心な信者として深い信仰と宗教心の持ち主でもあつた。彼は浄土真宗の教えに忠実に従い、さまざまな人道的な活動を行つていただけに仏の教えに逆らう行動をするはずはなかつた。「自分は仏教を知らなかつたら三井、三菱くらいの財産は作れただろう」<sup>(12)</sup>と後に回想さえしている彼の本音を疑うわけにはいかない。彼は毎年夏に有名な仏教学者を花巻に招待して合宿講演会を開いていた。

招かれた講師には、近角常観<sup>ちかづみじょうかん</sup>、多田鼎<sup>ただかね</sup>、暁烏敏<sup>あけがらすはる</sup>などがいたが、中でも暁烏敏が何回も招待されて花巻に来ていた。「暁烏敏は日本の宗教界にひじょうに大きな足跡を残した宗教家で、浄土真宗の大谷派に属していました。(中略)宮沢家は、その暁烏敏を毎年のように花巻の地に招いて講習会を開いています。当時、宮沢賢治は小学生でしたが、暁烏敏が花巻にやってくると、その身の回りの世話をやらされていた。食事の世話、お風呂の世話、床の上げ下げなど、全部賢治の仕事でした。暁烏が仏教講話をするときは、必ず末席にひかえ、膝をそろえて座つて聞いていたという」と山折哲雄も『デクノボーになりたい 私の宮沢賢治』<sup>(13)</sup>の中で書いておられるとおり、賢



治は、父が先頭に立って開いていた花巻仏教会夏期講演会に一〇歳のときから参加している。単なる一人の受講者として参加していたのではなく、講話してくれる講師たちのお世話をする役を果たしていたのである。

浄土真宗の教えによると、ただ念仏（南無阿弥陀仏）を唱えることで阿弥陀仏の慈悲を信じせしめられ、悪人を含むすべての人が浄土へ往生成仏できる。つまり、この宗派は絶対他力への信順を往生成仏の正因とし、阿弥陀仏の本願力は常に私たちに回向されているので、私たちは救われていると考えている。幼い賢治は当初この浄土真宗の教えに感化されていたに違いない。

しかし、次第に彼は浄土真宗の往生成仏に対する考え方を懷疑的に見るようになってきた。ひどい罪を犯した人でも、ただ念仏の朗唱だけで往生成仏ができるという考え方はおかしい、と思ったのであろう。そして彼は、自分の犯した罪業はこの世における自分自身の厳格な苦行によってしか贖うことはできないと教える法華経の理念に、引き付けられてしまった。つまり念仏を唱えていれば死んでから往生成仏できると教える他力本願中心の浄土真宗よりも、自分の努力によって死ぬ前に菩薩になり得ると教える法華経の教義の方が、賢治の耳に合理的に聞こえたのである。

宗教というものは精神的な面においても、物質的な面においても、すべての人類の救いを目指すものでなければならない。平等で貧富

の差のない社会を築き上げて、誰でも平和な暮らしができる環境を提供することこそが宗教の役目ではなからうか。一方で貧民を搾取して自分の懐を膨らませているのに、他方で念仏を唱えるだけで罪業が贖われるという教えは、彼には飲み込めなかった。この時点で彼は初めて自分の父の事業を疑いの目で見えるようになったのではない。しかし、まだ小学生なので、親に逆らう力もなく、自信もなかったので黙っていた。ただ、質入れにくる貧しい農民のわずかな収入をさえ搾取してしまう家業を、密かに心から嫌うようになっていただけである。

中学校時代の賢治は、自然の観察、山や森の散策などを主としていて、勉強を従としていた。優秀な成績で小学校を卒業した彼は一九〇九年の四月に県立盛岡中学校（現在の県立盛岡第一高等学校）に入学して親元を離れ、初めての寮生活を体験し始めた。それは彼にとっては、詩人、童話作家、宗教者、そして科学者として新しい人生を形成するための準備ができる絶好の過程でもあった。保守的な家からの解放は、彼に一人の個人として行動できる時間と空間を与えただけではなく、以前から心に抱えていた不平等な社会に対する不満感を表に出す下敷きを用意してくれたのである。

また、中学校時代の賢治は、人間の好奇心を押し殺し、想像力を押し殺す保守的な学校教育への反発の表れでもあったのか、自分の不満の気持ちを教師や寄宿舎の舎監への反抗的態度であらわし、心<sup>16</sup>

の葛藤を少しでも和らげるために岩手山に何回も登ったりしていた。鉱物採集や詩作取材のために岩手山によく登ったり、野山を散策したりしていたのではないかという見解が学者の中でも主流であるが、そのみが目的であつたのか疑問に思う。岩手山に数十回も登つたということ自体は、これよりも何か重要なものを探し求めていることを示唆しているのではなからうか。山や森は葛藤している人の心に安らぎをもたらす役割を果たす一方、想像力と創造性を培ってくれるところでもある。頻繁に山に登つたことの裏には想像力を育み、イメージネーションを培う目的もきつとあつたと思うが、同時に彼は一種の修行として山に登つていたのに違いない。すべての人類が平等になり、幸せになつてもらいたいという彼独特の正義感に基づき絶対的な真理を求めて行つていた修行に他ならなかつた。そして最後に、彼は、人間を含むすべての生き物にはこの地球上に平等に住む権利があるという絶対的な真理を、諸作品を通して肯定したのである。

賢治の人生に最大の影響を与えた外力は「法華経」の教えだといわれる。彼は一八歳のとき島地大等編の『漢和対照妙法蓮華経』を読んだ大きな感銘をうけた。釈迦の晩年に説かれた教えの極意と位置づけられている法華経は、一切の衆生がいつかは必ず「仏」に成り得ると教えている。「……お前たちが一切知者の知と、勝利者の徳である十力を獲得するときは、三十二の相あるすがたを有する仏

陀となつて（真の）涅槃を得るであらう」<sup>(17)</sup>つまり、法華経はすべての衆生を平等に見ているだけではなく、その奥義を聴いてその教えを信じようとする人でも必ず成仏することを保証している。しかも、人類のすべての苦悩や病からの解放をも保証している。法華経のこういう教えが彼に大きな影響を与えたか明確ではないが、賢治の羅須地人協会以降の行動から推測すれば、次のようなところから一番感動したのではないかと思う。

「また、宿王華よ、この『正しい教えの白蓮』という法門は、あらゆる衆生たちをすべての恐怖から救うものであり、すべての苦しみから解放するものである。喉が渴いた人々にとつての池のように、寒さに苦しめられる人々にとつての火のように、裸者たちにとつての衣服のように、商人たちにとつての隊商の長のように、子供たちにとつての母親のように、対岸に渡ろうとする人々にとつての舟のように、病人たちにとつての医者のように、暗黒に閉ざされた人々にとつての灯火のように、財産を求める人々にとつての宝玉のように、あらゆる城主たちにとつての転輪王のように、河川にとつての海のように、すべての暗黒を破るための松明のように、宿王華よ、ちようどそのように、この『正しい教えの白蓮』という法門は、すべての苦しみから解放するものであり、すべての病いを根絶するものであり、すべての輪廻の恐怖と束縛との狭く険しい道から解放するものである」<sup>(18)</sup>。

仏様のこの教えには貧富の差もなければ、上下関係の堅苦しさもなく、人類はすべて平等だという考えが終始一貫している。「強い意志と優しい慈悲心を持ちながら生きなさいと諭す」<sup>(19)</sup> 仏教とりわけ法華經の教えは、人類に生きる希望を与えているに違いない。賢治はおそらくこの思想に動かされたのではないかと思う。

これに惹かれてしまった彼は、益々父の営んでいた家業を嫌うようになり、父の入信している浄土真宗から遠ざかっていく。そして、一九一八年に盛岡高等農林学校を卒業した後、同学校でさらに二年間の研修生生活を過ごし、その後田中智学の設立した法華系の新宗教「国柱会」に入会した。それから、その翌年に上京して、国柱会の本部で街頭布教や奉仕活動をしながら童話を書き続けた。

宮沢賢治の法華經信仰及び国柱会入会は、彼を仏教至上主義の作家として非難したり、国粹主義的な日本論を強調していた日蓮宗の大きな支援者として評価したりするきっかけとなった。そのため彼の作品は適切な評価を受けずに長い間、暗黒の洞穴に放り投げられていたのである。しかし、彼は決して国粹主義的な日本論を支持するような人間でもなかったし、仏教至上主義を鼓吹するような人間でもなかった。彼はただ人間がみな生まれながらに平等であって、誰でも努めれば今生の内に菩薩に成れるし、地球上のあらゆるすべての生き物は兄弟姉妹であるという仏教の、とりわけ法華經の奥義に感化されて熱心な仏教信者となって人類の幸せのために一生を尽

くしただけである。つまり賢治の熱烈な信仰心に訴えたのは、日蓮宗の教理というよりはむしろ法華經の教えの方であった。<sup>(20)</sup> 日蓮宗は政治的な色彩もあつて自宗至上主義的な動向を見せているのに対して、その教義の拠り所となっている法華經の教えの中樞は普遍的な博愛で、生き物への慈悲であるに違いない。

賢治は大正七年に友人保阪嘉内宛に書いた手紙で、彼が法華經にどのように刺激されていたかを明確に記している。「南無妙法蓮華經と一度叫ぶときには世界と我と共に不可思議の光に包まれるのです あゝその光はどんな光か私は知りません」<sup>(21)</sup>。この光は彼の人生を導き、思考と行動の道を照らしたのだろう。

人間には感情（フィーリング）というものがあつて、その感情によつて思考と行動が支配されている。「例外なく、人のすべての意識行動は彼の中に、その時に現れたフィーリングによつて支配されている。もしフィーリングがなければ行動は起こらない」とインドの思想家A・ヴィディヤランカール（Anil Vidyalankar）が指摘している。<sup>(22)</sup> つまり、私たちのすべての意識的動作は私たちの内に現れる感情によつて導かれている。賢治にも感情があつた。それは、飢餓と病で苦しむ同胞への同情として、または動物や鳥類などすべての生き物に対する慈悲として現れ、自分の利益よりも彼らの救済を人生の目的にしたのである。地球上の貧困を撲滅することは自分の義務だと彼は考えた。それで宗教の教えを基盤に、彼は地質学者



として、そして百姓として休まず勤めたのである。

インド・東洋的な考えでは、人類の総合的成長を目指して同時に行う精神的な追求と科学的な探究は、決して相反するものではない。かえって互いに互いの属性となるものである。それに、家族や社会に対する義務を果たすこと自体は一種の精神的修養である。インドの聖典、ギーターの教えによると、他人の悲しみを自分自身の悲しみとみなす人こそ本当のヨーギー（行者）である。この世に住みながら何の執着もなく人のために仕事をするということはヨーギーにしかできない。「ヨーガと合一した人は、自分自身を、すべての生き物の中に見、すべての生き物を、自分自身の中に見る。そのために、彼は世界のあらゆるものを平等に見ている」<sup>(23)</sup>。賢治は一人のヨーギーであった。彼はすべての生き物を平等に見ていた。「みんなの為を思ふならば先づ自分を完成しなければなりません」<sup>(24)</sup>と考えた賢治は自分自身をまず完成するための手段として法華経に頼ったのである。皆のためを思うなら、皆と一緒にって共通の目的、つまりみんなの経済的發展と幸福のために努力せざるを得ない。家業を引き継いで商売をしていると自分の人生が益々裕福になっていくに相違ないが、商売は偽りであり、搾取であり、皆の幸福を希う良心の間には似合わないものである。彼の生前の行動だけではなく、彼の童話作品や詩歌を貫いている「自己犠牲の精神」「みんなの幸せは個人の幸せである」などの思想もその証である。

宮沢賢治の思考や行動に大きな影響を与えた外力にはまたキリスト教もあると思われる。小学生の時代から何らかの形でキリスト教的な世界観や価値観に触れるチャンスがあったに違いない。小学校五年生のときの担任であった照井真臣乳先生はクリスチャンであった。また、前述のとおり西洋の童話や民話をいろいろ読んでいた。

これらの童話や文学作品に反映されているキリスト教的思想、倫理、価値観の世界などに幼い賢治が気づかないはずはない。また、中学校時代には学校で英語を教えていたヘンリー・タピング牧師に感化され、「そのおかげで英語の能力を発揮していたようで、それが機縁になって、バプテスト派の教会に通うようになります」<sup>(25)</sup>。また、当時盛岡のカトリック教会に来ていたフランス人の宣教師ブジエー神父とも、良い関係を持っていた。さらに、中学校時代に寄宿生活をしていたが、当時の同室者であった高橋秀松という学生もキリスト教徒だった<sup>(26)</sup>。それに、花巻出身で、明治大正時代の日本キリスト教徒の象徴ともいえる内村鑑三の弟子であった斎藤宗次郎との関係も最近、宗次郎の日記の研究で明確になっている。要するに、信心深い仏教信者であった賢治は、同時にキリスト教の教えについてもかなり知識を持っていた。「銀河鉄道の夜」を始めいくつかの童話作品もそれを裏づけてくれる証拠である。

賢治の短い一生を分析してみると、三つの賢治像が浮かび上がってくる。まずは、宗教の精神に根強くこだわる賢治である。彼のす

すべての行動を導いていたものは、おそらく宗教の精神に他ならない。彼のこの宗教心は外からのいかなる勢力の影響にも揺るがないもので、終生彼の人生観ならびに宇宙観を顕現させ続けたと思う。法華經の精神は彼の人格を最終的に形成した一方、「觀念や幻想の部分で、父親に対してはもちろん、他者に対して大きく優越できる力」を与えてくれたので、自分にとって一番厳格な存在であった父親の指示に従わず、家業の後継を断つたり、自分の好きな道を歩んだりする勇氣を与えてくれたのである。

次は、偽りや人間の偽善的な行動に反発する強い正義感を持つている賢治の顔が浮かんでくる。近代文明の波に乗って自分勝手なことばかり考えて、自分の利益や幸福を求めるのに必死になっている人間の卑劣な行為を、彼が陰で笑っている。童話作品の「注文の多い料理店」「なめとこ山の熊」「どんぐりと山猫」「蛙のゴム靴」などは人間の欲張りを皮肉る内容を抱えている。もう一人の賢治は、限らない苦勞にさらされる人生を持つ貧しい農民を哀れむ心を持っている。農民の苦勞を自分で経験してみないと彼らの生活の状況を改善できないと考えた、農学校の教師を辞めて土を耕す決心をした賢治の顔である。

今まで見てきたように、宮沢賢治という詩人・童話作家の人格と思考の形成はさまざまな外力や外的現象によって完成されたものである。彼の考えでは、宗教も科学も人類に幸福をもたらすものでな

ければ、何の意義も持たない。だから、彼は、自分の持っている宗教的知恵と学問的知識を基盤に、科学と宗教を融合させて、人類の幸福のためにそれを利用しようと努力したのである。花巻農学校の教職を辞めて「羅須地人協会」を作り、貧しい農民のように自ら土を耕して野菜を作り、それで食べて行こうと決心したのも、地質改良のために全力を尽くしたのも、そのためである。彼の持っていた超人的能力と感受性、そして人並みはずれた幻想力は、執着を捨てた真理の追求者、つまりヨーギーが何十年もの歳月にわたる修行（苦行）のあげく達成し得るような神聖な力である。その力は彼に童話を書かせ、詩を書かせたのである。賢治の価値観や世界観は彼独特のもので、彼の文学作品を貫いている主要概念は、慈悲と同情であり、自己犠牲の精神であり、非暴力、不殺生、輪廻転生、菜食主義、そして罪業意識の概念である。

「自己犠牲の精神」は「非暴力と不殺生」の宇宙観を生み出し、人を「菜食主義」へ導く。その背景には、動物への「同情」と「慈悲」もあれば、輪廻転生の考えやカルマ（業）による因果関係の概念も働いている。それで、これらの概念を考えると、その相互関係を無視することはできない。つまり、賢治作品に顕現している東洋的・仏教的思想を客観的に且つ、正確に把握し解釈するには、まず、各概念の関連性を究明するべきである。

以下、賢治の作品を貫いている「自己犠牲の精神」「非暴力主義」

「不殺生」及び「菜食主義」概念の関連性はどんなものであるのか、いくつかの作品を中心に探ってみたいと思う。

### 賢治の「非暴力主義」と「自己犠牲の精神」

信心深い仏教徒で慈悲を自分の活動の指針にしていた賢治は、生き物すべてが共存共栄できる平和的な社会が理想的であると常に考えていた。つまり自分の利益のために相手に暴力を振るったり、強制的に相手を服従させたりしてはいけなし、相手に対して差別的な行動を強行するのも好ましくない。しかし、弱肉強食主義がはびこっている現実社会においては、自分の理想とする社会がただのユートピアにすぎないということも十分にわかっていた。にもかかわらず、彼は自分の思想を死ぬまで手放さなかった。この非暴力の概念は、実はインドのどの宗教にもみられるもので、生き物に対する慈悲、輪廻転生、因果関係（カルマの哲学）などに深い関係を持っている。恐ろしい凶器を持って自分に襲い掛かってくる敵に武器一つも持たずに、戦って勝てるものか、受動的な態度はかえって自滅に終わるのではないか、と疑問に思う人もいるだろう。実は、非暴力は精神的に強い人の使う武器である。そして、賢治の作品の中には非暴力・不服従の概念が貫かれている。

たとえば、「よだかの星」という童話の主人公であるよだかは、完全に非暴力主義を武器とする精神的に強い鳥である。平たいくち

ばしと弱い足を持っているよだかは、肉体の面からいうと非常に力のない醜い鳥である。しかし、他の鳥たちに軽蔑されているにもかかわらず、彼は平和的共存を重んじ、みんなの幸福を心から願う、思いやりの深い鳥だった。鳥社会の王ともいえる「鷹」はこういって彼によく嫌がらせをしていただけではなく、改名をさえ命じた。それは、自分の名前がよだかの名前の一部をなしていることを絶対許せないからである。よだかにとっては、それは意外な命令であったが、彼は少しも怖がらないで、「鷹さん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたものではありません。神さまから下さったのです。」と答えて鷹に服従しようとしなかった。よだかよりはるかに強い鷹は、よだかの精神的な力に驚いたのか、改名を実施するために二日間の間を与えて帰っていく。自分の名前は自分が好んでつけたものではなく、神様からいただいたもので、神様からいただいたものだから、勝手に変えるわけにはいかない。自分の名前を変えるより死ぬ方がいいと思うよだかは、まさに精神力の強い鳥だと思ふ。彼にとっては名前が自分のアイデンティティーの表面的な象徴で、それを確保することが、鳥としての面目を保つためには不可欠である。しかし、改名が不可能だと答えるときのよだかの言葉遣いが非常に丁寧で、相手を傷つけてはいけなし、という口調で話している。つまり、彼は自分の行動だけではなく、言葉遣いにさえ「非暴力」を掲げているのである。

賢治の考えでは、人が人を自己の利益のために扱い使うこと、または自分の考えを人に押し付けようとすることは、決して許すべきものではない。もちろん彼は父親を始め、自分の兄弟姉妹、親戚及び友人に法華経信仰への改宗を一生懸命に説き続けてはいたが、強制的に自分の決心を実現させようとはしなかった。それに対して、父の政次郎の方は、息子の浄土真宗離れを激しく非難していただけではなく家業を引き継ぐつもりもなく、自分の正しいと思った道を歩もうとする賢治の将来を、非常に不安に思っていた。わが子の将来を案じる親の心境はどんなものかよくわかるが、政次郎がしつこくなればなるほど、賢治は家業と、家の代々信じてきた浄土真宗から、遠ざかっていった。そして、仕事をする気さえなくなってしまう。そんな賢治に、父親は「きさまは世間のこの苦しい中で農林の学校を出ながら何のぞまだ。何か考へろ。みんなのためになれ。錦絵なんかを折角ひねくりまわすとは不届千万。アメリカへ行かうのと考へるとは不見識の骨頂。きさまはとうとう人生の第一義を忘れて邪道にふみ入ったな」<sup>(29)</sup>と食って掛かるのである。それぞれ違う価値観と宇宙観を持っていた賢治と父親の間で、毎日のように口喧嘩があった。妹のシゲは下記のような回想をしている。「兄は父とは人生の根本までつきつめて論じ、父の真宗の無氣力を激しく非難し、また父のいう世俗的な成功、地位とか財産とかを否定して、毎日毎日、あまりひどく争うので、母をはじめみんなで心配しました。

ほかの親子も、親子というものは、こんなに争うものかと思ったりしました」<sup>(30)</sup>。まるで鷹とよだかの間で交わされた口争いのようなものだ。しかし、彼は自分が正しいと思う道を歩む覚悟をするのである。そして、父の勧告や戒めを丁寧心に受け止めている振りをしながら、それにはぜんぜん従おうとはしない。やはり、非暴力と不服従の武器を利用して、彼は自分のアイデンティティーの確保をしたのだといえる。

肉体的に見ると、自分よりはるかに強い鷹と戦って勝つことは不可能であると十二分にわかっているよだかは、鷹との決闘を避けるべきだと決心した。何の罪も犯していないのに自分がなぜ皆に嫌がられるのか、彼にはさっぱりわからない。自分の今までの生き方を反省してみても、彼は鷹もおそらくたどり着くことのできない空のかなたへ飛んで行って、星になる。よだかのこの非暴力的な行動が、彼に鷹とは精神の上では比較にならないほどの力を与えている。自分を罪人のように取り扱い、苦しめている「鷹」に対して、表面的には醜くても、何ら鷹に劣るものではないという確信を持つよだかは、確かに勝利者である。自尊心の強いよだかが、どうして鷹の脅しに対して、受動的で無抵抗主義に基づく非暴力的振る舞いを見せたか、という論争を持ち出される可能性が十分ある。魂の力、慈悲の力は非暴力主義の精神である。モノへの執着を捨てることができないう人間、または相手の苦しみに関心がない人間には非暴力主義

的な行動はできない。赤ん坊の目白が巢から落ちていたときは、助けて巢へ連れて行ってやったよだかには、それが十分あった。<sup>(31)</sup>

肉体的に鷹ほど腕力を持っていないよだかにとっては、恐ろしい敵を打ちのめす唯一の手段は、精神の上で相手を襲って負かすしかない。鷹の指図に素直に従って、名前を「市蔵」に変えてその改名の披露を行ったならば、鷹はとても喜んだのだろう。また、逆に対一となって鷹と直接決闘しようとしたならば、瞬間に恐ろしい「鷹」に自分が殺されてしまったのだろう。私はこの童話を読むたび、いつもインド独立運動の父ガンジーの無抵抗主義を思い出さずにはいられない。ガンジーの提唱した「非暴力・不服従」の思想は、大英帝国の統治からのインドの独立を可能にした。「非暴力」を武器とした戦いは、結局は相手を精神の方から襲って、打ちのめす力を持っている。自己制御ができる人、言葉と行動による相手への暴力を避けることができる人こそ、無抵抗という受動的な行動で、相手がいかなる巨人であっても倒す力を持つのである。それらのことができる人の精神の力は、実際の武器より何倍もの破壊力を持っているに違いない。一滴の血も流さず敵を降伏させるよだかは、インド人にとってはガンジーの強さのまたの姿なのである。こういうところに、よだかの強さが顕現しているのではないかと思われる。「よだかの星」は比較的良好よく知られている作品で、日本国内外でたくさん研究の対象となっている作品である。一見したところ、社

会における差別、いじめなどの問題を、または弱肉強食的な現実を取り上げて描いている物語としか見えないので、今までの諸研究もこれらの問題点を中心に進められてきたと思う。表面的な側面だけを単純に解釈してしまうと、主人公のよだかはいじめや差別の対象となる弱者・敗北者にしか見えない。しかし、前述のようにこの作家の作意はそれとは違うところにあると思う。「よだか」は決して弱者でも敗北者でもなく、強烈な自尊心を持つ、生者としての究極の誇りの具現者であって、非暴力を武器に社会にはびこる悪鬼と戦う戦士である。星になりたいという自分の目的に達するまで、休まず、諦めず、努力をし続けるよだかは、貧困にあえぐ人々の苦痛を少しでも背負ってあげようと、地質調査や肥料設計に取り掛かった賢治の面影ではないだろうか。「……よだかは俄かにのろしのやうにそらへとびあがりました。そらのなかほどへ来て、よだかはまるで鷹が熊を襲ふときするやうに、ぶるつとからだをゆすつて毛をさかだてました。それからキシキシキシキシと高く高く叫びました。その声はまるで鷹でした。野原や林にねむつてゐたほかのとりは、みんな目をさまして、ぶるぶるふるへながら、いぶかしうにほしぞらを見あげました」<sup>(32)</sup>。鷹よりも強くなつたよだかは自分星になるまで気を落とさないで、高く、高く飛んで行つたのである。農学校の教職の仕事捨てて、百姓生活を送る決心をした賢治の決意も、両親、親戚及び周りの人々の意見と影響に左右されるもので



はなかった。

よだかの星を貫いているもう一つの問題は、「自己犠牲の精神」である。自分を犠牲にしてまで他人に幸せをもたらそうとする清らかな精神は、深い宗教心の持ち主で、生き物に対して情け深い、慈悲に満ちた心を有する聖人たる者の象徴である。生き物に対する同情・愛情そして慈悲の精神を持つ者には、「自我」というものもなければ、この「無常」の世界において欲望も執着も持たない。「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまひません。私のやうなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでせう。どうか私を連れてって下さい」<sup>(33)</sup>。空のかなたへ飛んで行って星になりたいと決心をしたよだかが、お日様のところへ行って助けを乞う場面である。自分の体が醜い、自分が肉体的に弱いものだと自覚しているにもかかわらず、彼が決してそれを口惜しがない。逆に自分自身に対して強い自信を持っているのである。それはなぜかというと、自分の体も燃えれば光が出ることは確かであるからである。その光で世の中が少しでも明るくなれば、自分の人生の目的が果たされたことになる。そしてその光は、相手に被害ばかり与える鷹を悔い改めさせて、救いの道へ導くかもしれない。

原子朗は天上世界へ旅するよだかの姿は、「自己救済の感動的な姿<sup>(34)</sup>」と指摘している。まさにそうであると思うが、よだかにと

っては「自己救済」は、むしろ「自己犠牲」でもあったに違いない。言い換えれば、彼にとつて、空への旅は自己犠牲だけではなく、自己救済の手段でもあったのだ。その結果、彼は燃える星になって、世に光を放っているのである。

世の暗闇を自分の体が燃えるときの光で明るく照らそうと決心したよだかは、まず生き物を殺してはいけないという「不殺生」の概念に目覚める。そしてその第一ステップとして、今までの自分の人生を反省して、不殺生を誓ったのである。無差別に生き物の命をとるほど恐ろしいことはないということに目覚めた彼が、不殺生の概念を広めようと必死に考える。自分の弟であるカワセミのところに行って「……そしてお前もね、どうしてもとらなければならない時のほかはいたづらにお魚を取ったりしないやうにして呉れ」<sup>(35)</sup>と不殺生を説教している。この地球上で一羽の鳥として生きていくために、しかも神様に許されている範囲内の虫殺し（殺生）しかやっていないのに、必要以上に徹底して自分を責め、悔いて深い嘆きかたをするよだかには、キリスト教的な原罪の意識も見られるし、物質文化に追われて息苦しく窒息状態になってきている人間社会の世俗的な束縛から脱出して悟り・菩薩への道を迎え、自我もなく、執着もない仏教・ヒンドゥー教の求道者のイメージも強く見られる。

「よだかは鳥から星へ転生したのである。宇宙のはてのはてで星となっていれば、そこではもう虫を食べずにすむし、鷹にも食べられ

ることではない。自分が他を犠牲にしなくてもいいし、自分も他の犠牲にならずにすむ。他者から愛<sup>36</sup>でられ、幸せを与える美しい星となつて青く輝いているのは、自分にとつても幸せである」と鶴田静は、星になったよだかを、「食物連鎖」を断ち切った鳥として、高く評価している。食物連鎖を断ち切ったということは、輪廻転生の輪から解放されたということでもある。人の幸福になるなら、自分の体が灼けてもよいという、自己犠牲的な考えこそ、彼を往生成仏への道へ導いたのである。そして、永遠に輝くようになったよだかの他界での生活は、この世での生活よりはるかに幸せになっている。

人々の幸福のために自己犠牲になつてもかまわないと思い、不殺生の道を辿るという類の話が、賢治のほかの作品にも見られる。たとえば、「銀河鉄道の夜」の中に出てくる蠅の話も、よだかと非常に似ている。いたちに見付かつて食べられそうになった蠅が一生懸命に逃げる途中、井戸の中へ落ちてしまう。「あゝ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられやうとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうこんなになつてしまった。あゝなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかつたらう」と悔い改める蠅は、自分がいたちに食べられた方がいたちが一日でも生き延びただろうと思う。そして彼は、自分の体をこの次にはみんなの幸せのために使つて下さい、と神様に願

っている。

小沢俊郎は、「銀河鉄道の夜」のさそりは、生命をつきつめた所において見て全人類的な献身へと飛躍する。そこに解脱もある」と指摘し、「皆に嫌われる毒虫が」捨身することによつて解脱して行く所を描いた場面は、作品の中でも「印象的で美しい場面」であると言っている。<sup>38</sup>つまり、他人のために自己を犠牲にしてもいいと考える蠅の、この世の煩惱を乗り越えて成仏していく姿は、美しく見えたのである。結局、その蠅もよだかと同じように、永遠に燃え続ける星となつたわけである。

また、同じ作品の主人公の一人であるカムパネルラが溺れた友人を救い上げる時に、自分自身が命を失つてしまうという無残な結末となるが、彼も人の幸福のためにいいことをしたと心得ている。銀河を走る鉄道で他界への旅をしている彼は、自分のお母さんがきつと悲しくなっているのではないかという心配もするが、同時に「……誰だつて、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸<sup>39</sup>なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さいと思ふ」と自分が人のために犠牲になつたことを喜び、お母さんが自分のしたことを許してくれるではなく、褒めてくれるだろう、と樂觀的に考えてもいる。彼にとつて、自分の命より大事なものは人の幸せだつた。友人のジョバンニも同じように考えている。「……僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだな

んか百べん灼いてもかまはない」<sup>(40)</sup>と思う彼は、皆の本当の幸いを探しにどこまでも一緒に行こう、とカムパネルラを心から誘っている。

同様に、「めくらぶだうと虹」のめくらぶどうも、もし虹が「もつと立派におなりになる為なら、私なんか、百べんでも死にます」<sup>(41)</sup>と人の幸せのためなら命を惜しまない自己犠牲の宇宙観を持っている。この「皆の幸せ」はこの世で見つけ出さねばならない。しかしそのために、自分の執着心や物を求める心を捨てなければならぬ。自己の利益ばかりを狙う行動は自己犠牲にはならない。つまり、他人のために自分が燃えなければならぬし、その燃えるときの炎は人に被害をもたらすものであってはいけない。よだかにしても蠍にしても、できることは何かというと、自分らの体が燃えるときの光で世を少しでも明るくすることだけである。世の人々の幸せのために無執着の心で、一所懸命に働くことができる人は、心に永遠の平安を感じ、すべての生き物の更なる幸せのために努め続ける。彼には自他の区別もなく、個人として獲得したいものもなければ所有したいと思う物もない。彼は殺生を罪とみなし、暴力を人類の全滅をもたらしものと見ている。こういうところには、人生の後半において純粋な菜食主義者として、自分の周りの人々の幸せだけを目指して生きようとした宮沢賢治の面影が察しられるのである。

## 賢治の菜食主義

宮沢賢治の作品を貫く「菜食主義」の概念の形成には、いくつかの要因が絡まりあっていることは確かである。彼が信心深い仏教徒であったことや、物事を合理的に分析し判断する能力を持つ科学者であったことなどが、大きな役割を果たしたに違いない。だが、賢治は生まれつきの菜食主義者ではなかったということも、周知のとおりである。宮沢家では精進料理もよく作られていたそうだが、完全に純粋な菜食にこだわることは決してなかった。家庭料理では魚がよく出たし、賢治も人生の前半に肉食を楽しんでいたのである。後半になると肉食を批判するようになったが、その背景には、不殺生カルマ（業）・輪廻転生の概念、貧しい人々への同情と思いやり、生き物に対する慈悲などの思想が働いたのではないかと思う。

鶴田静は『ベジタリアン宮沢賢治』の中で、賢治の菜食主義の思想について、「賢治は、他の種の生物の命を貴ぶために菜食をし、他の人間の幸いのために菜食をし、そして自己としては成仏のために菜食をしたのだ<sup>(42)</sup>」と述べている。不殺生・生まれ変わりの思想や輪廻転生の概念などは、ジャイナ教を始め、仏教、ヒンドゥー教など、インドの宗教思想に顕現している概念である。仏教の信仰者であった賢治は、これらの概念に早くから出会う機会は、多重多様であったに違いない。

賢治の菜食主義の観念が一番明確に顕現している作品として、「ビヂテリアン大祭」が挙げられる。この作品は、独特の内容と描写法が取り入れられている一方、人間の食生活の選択やその善悪の区別が客観的に描かれた作品として、注目に値するものであると思われる。仏教、とりわけ法華經の教えに確固たる信念を持ち、みんなの幸せは個人（つまり自分）の幸せであると確信していた信心深い賢治には、近代科学の可能性を客観的に把握して分析し評価する優れた科学者の才能もあった。賢治の心に宿っていたこの「信心深い信者」と「抜群の科学者」の面影が——その二重性が——この作品を貫いていて、「賢治の生命観、人生観、宗教観を知る重要な手掛かりになる作品」であることはいうまでもない。<sup>(43)</sup>

彼は、宇宙のすべての現象が彼の好奇心に訴え、類のない、独特な人生観と世界観を生み出すまでにいたったが、宗教と科学をどこかで結びつけて一体化させ、人類をはじめ地球上のすべての生き物に幸せをもたらそうと努めたのである。「ビヂテリアン大祭」を書く目的もおそらくそれであつたろう。賢治は、菜食の利点と肉食のもたらす害悪について十分な知識を持っていたに違いない。「ビヂテリアン大祭」と「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」（以降「大会見聞録」）の二作品の内容や構造からもこれがわかる。

「ビヂテリアン大祭」の中では、菜食の賛成派と反対派が交代にそれぞれ自説を主張し、討論が展開されて行き、終わりがちになると、

今まで肉食主義を強調してきた反対派の全員が、突然態度を引っくり返して菜食主義者になる決心を示すところで話が終わる。「賢治が vegetarianism についてかなりの知識と深い関心をもち、周到な用意のもとにこの作品のペンを取り、菜食主義とその反対論の種々相を整理して登場人物に語らせ、その中で、慈悲の精神から発した殺畜生戒に基礎を置く仏教的菜食主義の正当性を訴えようとしたのではないかと考えることが出来る」と上田哲が指摘している。もちろん、肉食をかばう討論者たちは、次々に科学的に根拠のある論理を持ち出して菜食主義者の信念を打ち砕こうとしているが、その裏には「科学者賢治」の面影が明らかに見える。しかし、同時に、確固たる信仰心の持ち主でもあつた賢治は、大自然の一員である人間は自然との一体化をはかるべき義務を課せられていると論じ、「菜食はみんなの心を平和にし互に正しく愛し合ふことができるのです」と、みんなに平和と幸せをもたらすものは「菜食主義」だけだとビヂテリアンの同盟者に言わせて、仏教的菜食主義を肯定しているのである。<sup>(45)</sup>

賢治は「ビヂテリアン大祭」の中で、菜食を厳密に守る菜食主義者を「菜食信者」と呼び、その精神として、理論的に「同情派」と「予防派」との二つに分けている。また、「大会見聞録」の中でも、テーズとして全く同じ分類の方法を採用している。<sup>(46)</sup>「同情派」の菜食主義者の考えでは、地球上のすべての動物は、人間もそれに含まれるが、

命を惜しむもので、人間が生き残るために勝手に動物を殺して食べることは無慈悲な、情けないことであると主張している。つまり同情派の考え方の裏には、ジャイナ教や仏教などの精神と教義である生き物に対する「慈悲」の思想がうかがわれる。

「同情派」と云ひますのは、私たちもその方ではありますが、恰度仏教の中でのやうに、あらゆる動物はみな生命を惜むこと、我々と少しも変りはない、それを一人が生きるために、ほかの動物の命を奪って食べるそれも一日に一つどころではなく百や千のこともある、これを何とも思はないでゐるのは全く我々の考えが足らないのでよくよく喰べられる方になって考へてみると、とてもかあいさうでそんなことはできないとかう云ふ思想であります<sup>(47)</sup>という解釈の中に賢治の宗教観が貫かれているのである。作品の語り手である「私」自身も、彼は作家の面影であるに違いないが、このグループに入っている。

それに対して、「予防派」は、肉類や魚など動物質を食べるときさまざまな病気になるってしまう可能性が高いから、動物への慈悲のためではなく、病気予防のために動物質を避けるという考えを持つている。また、この「同情派」と「予防派」は菜食の具体的な実施方法、つまり食料品の選択に基づいてさらに三つのグループに分けられている。「大会見聞録」では、Vet.の方法として「絶対派」「折衷派」及び「大乘派」に分類されているが、第一グループは「動物質のものは

一切食べない」人で、第二グループは「チーズ、バター、卵などは、生き物を殺さないのので食べてもよい」と考える人で、第三グループはいくら生き物を殺さないといつても、人間もこの世の中にいる動物の一つで、「多くのために一つの命を入用せざるを得ない」といふとき（動物を）殺してもいいと思う人である。賢治のこの分け方は非常に現実的で、我々の周りにいる菜食主義者を調べてみれば、ほとんどはこの三つのグループのいずれかに属していることがわかるだろう。

このような分け方をしている賢治が、自分も「同情派」に入ると明確に宣言していること自体、彼がいかに「菜食主義」と「不殺生」を重要視していたかを証明してくれると思われる。生き物が「命を惜しむ」という考え方、つまり殺される動物の苦しみを思うときの悲しさこそ、賢治に菜食主義への転向を急がせたのではない。親友であった保阪嘉内宛に寄せられた手紙に「私は春から生物のからだを食ふのをやめました<sup>(48)</sup>」と書いているように、賢治は一九一八年頃に菜食に切り替えた。鶴田静は、「賢治の、生来的な生き物の命を尊ぶ精神がベジタリアニズムであり、それを因果応報という仏教的な命題へと転嫁させ、そして帰結させているのだ<sup>(49)</sup>」と指摘している。それに、同氏は、賢治の菜食主義は、生き物に対する慈悲と、生き物の命を大事にしなければならないという考え方に深く結びついていることを認めているものの、彼の「ベジタリアニズム



を鼓舞したのが、ピタゴラスであり、トルストイであり……」<sup>(50)</sup>と主張している。ピタゴラスやトルストイの影響はあったとしても、「命を惜しむ」生き物を哀れむ賢治のこの決心の裏には、人類すべての幸福への念願が含まれている一方、「輪廻転生」のインド・仏教的思想が根深く顕現しているに違いない。

作品の中で、「印度の聖者たちは実際故なく草を伐り花をふむことも戒めました」「印度の聖者たちは濾さない水は呑みません」「今日のビデリアンは実に印度の古の聖者たちよりも食物のある点に就て厳格である」と、三箇所<sup>(51)</sup>でインドに関する発言がある。

言うまでもなく、インドは東洋におけるさまざまな宗教、哲学、思想の発祥地で、古代から菜食主義の食生活が広がった国の一つである。アヒンサー（不殺生）、非暴力などという宗教に基づいた概念が、その主な理由となったと思う。生き物・動物は「生命を惜しむ」という考え方、つまり不殺生は、仏教より数百年前に生まれたジャイナ教が「五大誓戒」の中で一番重要な項目として持ち出した<sup>(52)</sup>概念で、生きとし生けるものはすべて生きること必死に願っている<sup>(53)</sup>ので、どの生き物でも勝手に殺されることは望んでいないと強調した。ヴェーダ時代の古代インドでは、動物犠牲を捧げて神々を喜ばせることは日常茶飯のような出来事であった。一度神に供えられた動物の肉は、司祭たちの間で分けて食べられていた。つまり、ヴェーダ時代までのインド人が肉食をよくしていたということは、紛

れもない真実である。古代ヒンドゥー教の社会体制を確立させるのに大きな役割を果たした『マヌ法典』の中にも、可食・不可食の野菜、肉、魚、飲み物などの名前が列記されている。たとえば、にく、にら、玉葱、茸などの野菜、猛獣類、鶏、雀、鶴等の鳥肉、すべての魚類などは禁じられている食べ物の中に入る。言い換えれば、マヌ法典に記されていない動物や、鳥類の肉を古代インド人は食べていたことになる。宗教的な儀礼や結婚式などでも肉食が許されていた<sup>(54)</sup>そう<sup>(55)</sup>で、上位カーストのバラモンも美味しい肉料理を競って食べていたに違いない。

この退廃的な古代インド社会の儀式や風習への反発として「不殺生」の観念を抱えてジャイナ教が現れ、神々に動物を生贄として捧げることが厳しく批判した。また、ジャイナ教は、この世界に無限の靈魂が生まれては消えていくが、「靈魂が輪廻転生を繰り返す根柢には行為とその結果靈魂に付着する業とがある。その行為を究め捨てる<sup>(56)</sup>ことが生死の輪から脱出する手段となる」と教え、身、口及び意による殺生を食い止める必要性を説いた。ジャイナ教によるとすべての靈魂を、地、水、火、風の各元素に植物と動物と、六生類に分類することが出来る。人間のどんな行為でも、この六生類の靈魂を何らかの形で殺したり、傷つけたりすることになる。それで人間には、殺生の罪から逃れる逃げ道はないのである。つまり、ジャイナ教では、人間は常に生き物を殺している<sup>(57)</sup>ので、殺生を食い止め

ない限り、業の輪からの解放も、最終目的の「解脱」も達成できないと考えられたのである。だから、生水をろ過して飲むことや、呼吸によって空気中の微生物がたくさんなくなってしまうのを防ぐために、口にマスクを取り付けて呼吸することなど、実生活ではなかなか守ることが難しい戒律を信者に義務付けたのだが、その結果、殺生行為が減り、菜食主義が広がり始めた。

そこで、生き物に対する「慈悲」の精神を教義とする仏教が発祥して、輪廻転生や因果応報に基づく哲学が広まるに連れて、さらにインド人の「不殺生」や「非暴力」主義が一般大衆の間にも広がり、菜食は「徳目」と見られるようになった。仏教の經典の中でも肉食を信者の食生活から取り除く必然性を説くところがあるが、賢治が愛読していた大乘仏典の「法華経」のなかにも、「……豚肉屋、鳥肉屋、獐をするもの、屠殺人……たちにも近づかない」と厳しく戒め、良家の息子でも娘でも「……芸人、格闘家、拳闘家、酒屋、羊肉商、鳥肉商、豚肉商、淫売宿の主人である人々を快く思わないであらう」<sup>(56)</sup>と物理的に彼らに近づくことだけではなく、彼らのような職業に携わっている人々のことを考えることさえ好ましくないと戒めている。日本でも仏教の伝来以降、宗教の戒律として肉食が禁じられた一方、菜食の概念がだんだん上位階級から一般民衆へと広がり、明治維新までのおよそ千年の間、日本人は菜食主義を守ってきたのである。要するに、仏教も肉食を禁じ、不殺生と非暴力の必要性を

重んじ、菜食を普及させようとしたのである。

インド全土に広がった仏教の勢力に歯止めをかける形で甦って出現した「ヒンドゥー教」は、いくつかの宗教的解説を導入して、「不殺生・肉食禁止」を実施して「殺生禁止・菜食主義」を一般化させようとした。まず最初にあげるべきは、「カルマ」及び「生まれ変わり」の思想である。人は現世の「行い」つまり「カルマ・業」によって、来世に生まれ変わるので、身近にいる生き物は自分の親、兄弟姉妹、子供、夫、妻または親戚であるかもしれない。特に、現世の生活中に動物を殺した者は、いつかきつと自分の殺してしまった動物に生まれ変わる。だから生き物を決して殺してはいけないと戒めた。この戒律は、肉食がはびこっていたヴェーダ時代の社会にきわめて大きい影響を与えたに違いない。肉食をしていた聖職者をはじめ、多くの人が次第に不殺生を重んじるようになり、菜食が食生活の主流となったのである。また、多神教であるヒンドゥー教は、命のあるものにも命のないものにも「神」が在ると考え、生き物を殺害するのを「罪」とみなし、殺生を食い止めようとした。たとえば、道を歩くとき小さい命を踏み殺す可能性があるもので、目の前の路上をよく見ながら歩くようにしなければならない。自分にとって有害な虫であっても殺さず逃がしてやるのが徳目である。

次は、いわゆる穢れケガレの概念がヒンドゥー教徒の日常生活に染み込んで、インド人の食べ物に対する考え方がくつがえされたことが挙

げられる。ヴェーダ時代以降になると、職業に基づく「カースト制度」が成立し、最上位のカーストに当たる聖職者つまり「バラモン」の間では動物の肉とか血液は「魂」の宿る体を汚すものとして見られ始め、次第にほかの上位カーストの間にもこの考えが染み込んで定着するようになった。ヒンドゥー教のこの不浄観は、すべての物質を不浄とみなし、動物の肉と血を忌み嫌う結果となった。つまり、ヒンドゥー教にとって、「食事は一種の儀礼とみなされ、食事の場と食物は常に清浄でなければならない」という穢れ概念が定着し、彼らの菜食主義への変遷を実現させたのであるといえる。それに、数多くの動物たちが、神々の乗り物として崇められたり、神聖な力を持つ生き物として崇拜されたりするようにもなった。たとえば、牛、蛇、ねずみ、孔雀、象、猿などは聖なる生き物で、猿や蛇が祀られている寺や礼拝堂もたくさん造られた。

第三の主な理由として取り上げられることは、上述のジャイナ教や仏教と同じく、ヒンドゥー教にも見られるアヒンサーの思想の実践である。生き物は皆命を惜しむもので、人間が勝手にそれを殺して食することは無慈悲なことである。肉を食する人間は魂（アーマン）の居所である自分自身の体を穢す傍ら、生き物に対する同情や哀れみを持たない無残な人間になってしまう。

およそ二〇〇年前に書かれたタミール語の有名な文学作品『テイルクラル』（Thirukural）でも、「自分の肉体を太らせるために他

の肉を食べる者はどうやって同情（哀れみ）を持てるのだろうか（詩句二五一）。凶器を持つ者は慈悲を持てるか、肉を食うものの心に哀れみ（同情）はきつと生じないだろう（詩句二五三）。情感を捨てた、知覚力のある人は動物の肉を食い物にしない（詩句二五八）<sup>(58)</sup>と肉を非難している。このことからこの考え方の奥行きがわかるだろう。このようにして、多くのインド人の食卓から肉が消え、現在でもおよそ四割のインド人は純粋な菜食主義者である。

しかし、ここで特記すべきことは二つある。まず、牛乳及びヨーグルト、バターなどの乳製品は、動物質であるにもかかわらず古代から聖なる健康食としてインド人に愛用されてきたことだ。菜食者、肉食者を問わずインド人なら誰でもこれらの乳製品を日常的に消費している。もう一つのポイントはヒンドゥー教の教義や世界観における大きな矛盾の一つである。ヒンドゥー教は多神教で、宗派も数え切れないほど多くあり、中には原始的、シャーマン的なものも含まれている。殺生を罪とみなしている一方、神や女神を喜ばせるために生き物を生贄として捧げる宗派もあるので、ヒンドゥー教ならすべての信者が菜食者だとか生き物を殺さないものだとは思っていない。では大きな勘違いとなる。

上述のとおり、菜食が宗教的生活の根拠となっているインド人の「菜食主義」の思想は、健康食として菜食を優先する一部の欧米人の菜食主義の考え方と全く違うもので、賢治もそれに十分に気づいて

ていたに違いない。それがため、賢治は作品中インドのことに繰り返し言及して、菜食主義に対する自分の確信を定着させようと努力したのではなかろうか。

また、賢治が作品の中で菜食主義者を理論的に「同情派」と「予防派」の二つに区別しているのに対して、インドの菜食主義者は主に三つの派に区別できると思う。まず、「宗教派」つまり「生活派」で、インドにおける菜食主義者の大半はこの派に属し、賢治も言っているように、彼らを「菜食信者」と呼んだほうがむしろ正確であるかもしれない。「宗教派」の菜食者のほとんどはヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教などの信者で、彼らは生まれてから死ぬまで肉、魚そして卵を一切食べない純粋な菜食主義者である。第二の派は作品と同じく「同情派」つまりいわゆる「動物愛護派」である。この派には各宗教の信者、社会の各階層の人が入っているが、彼らは自ら肉、魚など動物質の料理を食べないし、人間が生き物を勝手に虐待したり殺害したりしていることに対して反対運動なども起こしている。第三の派は「予防派」で、作品に書いてあるように、生き物への「慈悲」や「同情・愛情」のためではなく、病気になるように体の健康状態を維持する目的で菜食に切り替えた人々の属する派である。

次に、実際に食べる食品を基にインド人菜食者をさらにいくつかのグループに区別することができる。まず、牛乳や乳製品を食べるが、それ以外の動物質を一切食べないという純菜食主義者で、じゃ

がいも、玉葱などの根菜をさえ食べない人が含まれているグループである。もちろん、このグループには菜食主義を厳格に守るジャイナ教徒やヒンドゥー教の最上位カーストのバラモンが多いが、他のカーストの人もかなり含まれている。肉や魚を食べると、汚れるという発想も背景にあるが、生まれ変わりの教義やアヒンサーの概念が基になっている。次に、卵や玉葱のような根菜などを食べる菜食主義者で、このグループは数から見ると一番多い。三番目のグループは、動物の肉はだめだが、魚なら食べるという偽善的な菜食主義者で、海岸沿いのインド人、特にベンガル地方の人の間にはカーストにかかわらずこの派に属する菜食者が多い。もちろん、この地方のバラモン人も魚介類をよく食べている。また、四脚の動物の肉と魚を食べないが、鶏肉なら食べるというグループもあって、彼らも自らを菜食主義者と呼んでいる。これで、賢治による作品内の菜食主義者の分類とインドの実際の菜食主義者の分類は似ているものか大体わかるだろう。

作品中、菜食主義に反対する異教徒の人、つまり肉食を主流とする「混食者」はまずイギリスの経済学者マルサス (Malthus Thomas Robert, 1766-1834) の人口論を持ち出して、肉食主義をかばい、人類にとって動物質はいかに重要なものであるかを納得させようとしている。人口の増加に対して、農業ができる土地は相対的に増えないのでどうしても肉食に頼るしかないとの主張である。また、人間

には草食動物にしか見られない臼歯と肉食動物に見られる犬歯があるので、人間は混食をするべき動物であると、混食主義者がさらに主張し続けている。地質学者で農民の惨めな生活ぶりを見ていた賢治の中に眠っていた科学者がここで顔を出しているのは一目瞭然である。

しかし、肉食はたして人類が立ち向かっているすべての問題の解決になるのか。東洋的神秘主義に基づいた宗教観を持っていた賢治はそれを懐疑的に見ていたに違いない。大正一〇年八月一日に賢治が関徳弥宛に送った手紙に、「七月の始め頃から二十五日頃へかけて一寸肉食をしたのです。それは第一は私の感情があまり冬のやうな工合になってしまつて燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思つて断然幾片かの豚の脂、塩鱈の干物などを食べた為にそれを感じかけにして脚が悪くなつたのでした。然るに肉食をしたつて別段感情が変わるでもありません<sup>(59)</sup>」と書いているが、ここには肉食に対する彼の批判が明白に表されている。肉食は一時的に人間の体力を増やし、体をたくましくする働きをするかもしれないが、次第に体調を崩し恐ろしい病を得る原因にもなるのだということは、信心深い仏教信者で、一科学者でもあつた賢治は、十分理解していたようだ。それゆえに、「一日ニ玄米四合ト／味噌ト少シノ野菜ヲタベ」と「雨ニモマケズ」の中に書いてあるように、菜食に完全に切り替える

ことを決心して農民生活を選んだのだろう。

肉食は人間の動物的な本能を高め、暴力を振るうやうなものにさせると、インド人は昔から信じてきた。そして、前述のいくつかの理由とともに、これもインド人が肉食から離れる一つの主な理由となつた。今も、この世の物質的な生活に飽きて、苦行者としての

「林住期」「出家期(巡礼期)<sup>(61)</sup>」または「隠居生活」に入るインド人がまずやることは、肉食を完全に止めることだ。逆にいえば、菜食は人間の心を優しくし、他の生き物に対して同情と慈悲を持つ心を作り上げ、平和的な共存共栄を可能とすると信じてきたのである。菜食のもたらす「幸福」はどんなものであるかを十分理解していた「宗教的求道者」賢治は、肉食の利点や大切さについて議論している「科学の追求者」賢治に、「……肉食を食べるときその動物の苦痛を考へるならば到底美味しくはなくなるのであります<sup>(62)</sup>」と反論し、野菜がみんなの心を平和にして、互いに愛し合うことにしてくれるのだと強調してから、仏教の「輪廻転生」の概念を持ち出して、肉食者の議論にとどめを刺そうとしている。

「総ての生物はみな無量の劫<sup>カルパ</sup>の昔から流転に流転を重ねて来た。(中略)一つのたましひはある時は人を感じる。ある時は畜生、即ち我等が呼ぶ所の動物中に生れる。ある時は天上にも生れる。その間にはいろいろの他のたましひと近づいたり離れたりする。即ち友人や恋人や兄弟や親子やである。それらが互にはなれ又生を隔てて



はもうお互に見知らない。無限の間には無限の組合せが可能である。だから我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である」<sup>(63)</sup>。この輪廻転生の考え、つまり「生まれ変わり」の概念こそ賢治の食生活に關する世界觀を形成したといえる。そうだとすれば、それはインドにおける宗教的菜食主義者の考え方と一致するもので、菜食主義の背景にあるインド・仏教的思想の存在の確定も可能になると思う。

### 終わりに

宮沢賢治は自分が理想と思つた道を恐れることなく歩んだ賢人であつた。自分独自の人生觀・世界觀を持つていた彼は、その理念を生かした活動を行い、自分の想像していた理想社会の実現を目指して全力を尽くした。みんなの幸福は個人の幸福の元となるものであると確信していた彼が、一家の長男として家業を引き継いで実家をさらに裕福にしようとしなかつたのも、名譽ある花巻農学校の教師を辞めて自耕自炊の農民生活を選択したのも、自分の理想どおりの人生を送るためであつた。

人のために尽くす人間の心は常に燃え輝く「貝の火」<sup>(64)</sup>のようなものである。生き物に対する慈悲心と同情心の体現者であつた子ウサギのホモイが溺れて死にそうになつたひばりの子を、自分の命を惜しまずに急流に飛び込んで救つたお礼に鳥王から贈られたものは、「貝の火」の玉であつた。森の共存者である鳥類やその他の生き物

たちに対するホモイの思いやりに満ちた行為が続けば続くほど、「貝の火」もより明るく燃え輝くのだった。つまり、この玉を持つてゐる者は、他人の幸福を希う善行だけをしていれば、たとえ落ちてしまつても、危険にさらされてしまつても玉にキズも曇りもつかない。賢治の心にも「貝の火」が燃え続けていた。生き物を哀れみの目で見るという仏教の教えを抛り所に、貧困にあえぐ同胞の労苦を少しでも軽くしてあげようと東奔西走していた賢治の心の「貝の火」は常に燃え輝いていたに違いない。

生き物に対する慈悲の精神は彼のすべての行動の原動力であつた。それに不殺生、非暴力と自己犠牲の觀念及びカルマ・輪廻転生の觀念が結合して彼の世界觀を形成する要因となつたのである。「……賢治は近代文明の深奥を見つめていた人のように思われる。近代文明の奥の奥には人間中心主義の殺害精神が宿っている。その殺害精神に、賢治は慈悲の精神からの厳しい批判の目を、なげかけるのである。(中略)すべての生きとし生けるものが相いいたわりあい、相い愛しあい、それぞれ持つて生れた生命の力を最大限に發揮する世界、それが賢治の理想の世界であり、彼はそこへと現代文明の方向を志向させようとするのである」<sup>(65)</sup>と梅原猛が指摘しているとおり、地球上のすべての生き物の幸福と共存共栄、は彼の切望したものであつて、それを目指して一生を尽くしたのである。

注

- (1) 原子朗「インドの賢治」『東京新聞』(夕刊)二〇〇六年三月三一日付。
- (2) 『新』校本宮澤賢治全集 第十五巻 筑摩書房 一九九五年 二一六〜二一七頁(書簡一九五)。
- (3) 同書、同巻 二二一〜二二三頁(書簡二二二)。
- (4) マロリ・フロム『宮沢賢治の理想』(川端康雄訳) 晶文社 一九八四年 一四頁。
- (5) 賢治が小学校五年生のときの担任の先生照井真臣乳はクリスチャンで、内村鑑三の弟子であった斎藤宗次郎と交流していたようである。
- (6) 山折哲雄は『デクノボーになりたい 私の宮沢賢治』(小学館二〇〇五年)の中に賢治のキリスト教世界との接触はどんなものであったのかを詳しく説いている。
- (7) 山折哲雄『デクノボーになりたい 私の宮沢賢治』小学館 二〇〇五年 五頁。
- (8) 『新潮日本文学アルバム二二 宮沢賢治』新潮社 一九八四年 七頁。
- (9) 同書 八頁。
- (10) 『校本宮澤賢治全集』第十四巻 筑摩書房 一九七七年 一一七二頁。また、堀尾青史は自著『年譜 宮澤賢治伝』(図書新聞社一九六六年)の中で、賢治が後年八木先生に会ったときに「私の童話や童謡の思想の根幹は、尋常科の三年と四年ごろにできたものです。その時分先生(八木)が『太一』のお話や、『海に塩のあるわ

け』などいろいろのお話をしてくださったじゃありませんか。そのとき私はただ蕩然として夢の世界に遊んでいました。いま書くのもみんなその夢の世界を再現しているだけです」と語ったと述べている(一六頁)。

- (11) 見田宗介「修羅」三木卓・他『群像日本の作家 一二 宮澤賢治』小学館 一九九〇年 二四頁。「立志」という題名の作文を書かせた八木英三先生は、賢治の没後の思い出話の中で「賢治君も同様に家業をついで商売にいそしむ趣が、やつぱり二三行にかいてあった」と語っている。『校本宮澤賢治全集』第十四巻 一一七頁を参照。
- (12) マロリ・フロム 前掲書 二二三頁。
- (13) 『校本宮澤賢治全集』第十四巻 筑摩書房 一九七七年 四一三頁。

- (14) 前掲書『新潮日本文学アルバム二二 宮沢賢治』 六頁。
- (15) 山折哲雄 前掲書 三八〜三九頁。
- (16) 前掲書『新潮日本文学アルバム二二 宮沢賢治』一五頁。
- (17) 松濤誠康・他訳『大乘仏典四 法華経I』第七章 過去の因縁(化城喻品) 中央公論社 一九七五年 一二二頁。
- (18) 松濤誠康・他訳『大乘仏典五 法華経II』第二十二章 薬王菩薩(薬王菩薩本事品) 中央公論社 一九七六年 二〇〇〜二〇一頁。
- (19) 原子朗「宮沢賢治とはだれか」 早稲田大学出版部 一九九九年 六七頁。
- (20) マロリ・フロム 前掲書 三二頁。
- (21) 前掲書『新』校本宮澤賢治全集 第十五巻 五九頁(書簡五

〇。

- (22) A・ヴィディヤランカール『ギター・サール』(長谷川澄夫訳) 東方出版 二〇〇五年 一七頁。
- (23) 同書 詩句六一二九 一一四頁。
- (24) 前掲書『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十五卷 一一〇頁(書簡九三)。
- (25) 山折哲雄 前掲書 三九頁。
- (26) 同書 四一頁。
- (27) 三木卓「若い賢治」三木卓・他『群像日本の作家 一二 宮澤賢治』小学館 一九九〇年 一〇頁。
- (28) 宮澤賢治「よだかの星」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第八卷 筑摩書房 一九九五年 八四頁。
- (29) 前掲書『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十五卷一七六頁(書簡一五四)。
- (30) 堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』図書新聞社 一九六六年 八六頁。
- (31) 宮澤賢治「よだかの星」前掲書 八五頁。
- (32) 同書 八九頁。
- (33) 同書 八七頁。
- (34) 原子朗 前掲書 九〇頁。
- (35) 宮澤賢治「よだかの星」前掲書 八六頁。
- (36) 鶴田静『ベジタリアン宮沢賢治』晶文社 一九九九年 三三頁。
- (37) 宮澤賢治「銀河鉄道の夜」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十一卷 筑摩書房 一九九六年 一六三頁。

- (38) 小沢俊郎「紅い擦り傷―賢治地理「南斜花壇」―」統橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成』第一六卷 日本図書センター 一九九二年 三七八頁。
- (39) 宮澤賢治「銀河鉄道の夜」前掲書 一三八頁。
- (40) 同書 一六七頁。
- (41) 宮澤賢治「めくらぶだうと虹」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第八卷 筑摩書房 一九九五年 一一二頁。
- (42) 鶴田静 前掲書 二五七頁。
- (43) 上田哲「宮沢賢治 その理想世界への道程」明治書院 一九八五年 一六七頁。
- (44) 同書 一七六頁。
- (45) 宮澤賢治「ビザテリアン大祭」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第九卷 筑摩書房 一九九五年 二二九頁。
- (46) 宮澤賢治「一九三一年度極東ビザテリアン大会見聞録」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十卷 筑摩書房 一九九五年 三三八頁。
- (47) 宮澤賢治「ビザテリアン大祭」前掲書 二〇八頁。
- (48) 前掲書『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十五卷 六九頁(書簡六三)。
- (49) 鶴田静 前掲書 五四頁。
- (50) 同書 六八頁。
- (51) 宮澤賢治「ビザテリアン大祭」前掲書 二三二頁と二三九頁。
- (52) ジャイナ教の歴史的発展、教義、哲学の展開などの詳細については、谷川泰教「原始ジャイナ教」及び宇野惇「ジャイナ教哲学の

展開』『インド思想1』（岩波講座第五巻・東洋思想）岩波書店 一九八八年、を参照のこと。

(53) 可・不可食の詳細は、渡瀬信之著の『マヌ法典 ヒンドゥー教世界の原型』（中央公論社 一九九〇年 一二三―一二四頁）及び田辺繁子訳『マヌの法典』（岩波書店 一九五三年 一四五―一四六頁）を参照のこと。

(54) 谷川泰教『原始ジャイナ教』『インド思想1』（岩波講座第五巻・東洋思想）岩波書店 一九八八年 七四頁。

(55) 松濤誠廉・他訳『大乘仏典五 法華経II』第十三章 安楽な生き方（安楽行品）中央公論社 一九七六年 六三頁。

(56) 同書 第二十六章 まったく吉祥なるといふ菩薩（普賢菩薩勸発品）二五四頁。

(57) 森本達雄『ヒンドゥー教―インドの聖と俗』中央公論新社 二〇〇三年 二六二頁。

(58) テイルヴァルヴァル(Thiruvallavar)『ティルクラル』Thirukural 一六章「肉食について」（これらの詩句の日本語訳は、筆者がV. V. Abdulla Sahib のマラヤラム語訳を基に翻訳したものである）。

(59) 前掲書『へ新』校本宮澤賢治全集』第十五巻 二二八頁（書簡一九七）。

(60) 宮澤賢治『雨ニモマケズ手帳』『へ新』校本宮澤賢治全集』第十三巻（上）筑摩書房 一九九七年 五二一―五二五頁。

(61) インド人（ヒンドゥー教徒）は人間の一生を「学生期」「家住期」「林住期」及び「出家期（巡礼期）」と、それぞれ違う役割を果

たさなければならぬ四つの時期に分けて考えている。それを「四住期」（チャトウラーシユラム）と呼ぶ。「学生期」では、ヴェーダなどの学問を行い、知識を蓄え、次の時期の人生を送るための準備をする。そして、成人になると結婚して、子供を作り家族を養う「家住期」に入る。妻子の扶養を一所懸命にやって、子供が自立して人生を送れることを確保してから、「林住期」に入り、苦行やヨガで身体と心を鍛える。それから、人生の最終目的である「モクッシャ」（輪廻転生からの解放）を目指して、「巡礼期（出家期）」に入るのである。非常に理想的な分け方であるが、実生活ではなかなか実行しにくい。それでも、今もこれを厳守しているインド人もいないわけではない。

(62) 前掲書『へ新』校本宮澤賢治全集』第九巻 二二四頁。

(63) 同書 二四一―二四二頁。

(64) 宮沢賢治の童話作品の一つ。「貝の火」は前掲書『へ新』校本宮澤賢治全集』第八巻に載っている。

(65) 梅原猛「宮澤賢治と風刺精神」三木卓・他『群像日本の作家 一一 宮澤賢治』小学館 一九九〇年 三一頁と三三頁。